

西日本豪雨

被災地支援の県内医療者に聞く

「災害医療の課題は」

200人以上の犠牲者を出した7月の西日本豪雨。猛暑の中での復旧作業は困難を極め、1カ月が過ぎた今も避難生活を送る人たちがいる。近年の大規模災害で、被災後に避難生活のストレスや持病の悪化で死に至る「災害関連死」が注目され、被災後の心身両面での健康管理の重要性が認識された。今回の豪雨災害の被災地で医療支援に当たった県内の医療関係者に、被災地の医療・健康支援の現状や課題を聞いた。

静岡赤十字病院の救護班は振り返る。救護班は被災地は広島県呉市安浦地区。難所の掘り出しと、被災者が救護所活動や巡回診療らが発信する情報から、を行った。出発前は情報医療介入できていない地がなかったが、現地では域を診察して回った。ラ情報共有されていた。救イフラインの復旧に加え、地元薬剤師会や開業

医の動きも早く、薬剤や医療物資の供給に大きな問題はなかったという。救護所を訪れる人たちが訴えた症状の多くは、ほろりによる目の痛み、片付け作業中のけがや砂塵で済んでも、話をしていると涙を流す人やサイレンの音に敏感になってくる人もいた。新潟県中越地震や東日本大震災でも医療活動を行った看護師の鈴木直子さん(47)は、これまでの経験を踏まえ、一症状の程度にかかわらず、誰かに「大丈夫」と言ってもらいたい様子だったと被災者の心のケアを課題に挙げた。

県歯科医師会の柳川忠広会長(63)は、災害を見据えた診療体制の強化を指摘する。日本歯科医師会副会長として被災状況を回り、被災した歯科医院で、紙のカルテを一枚一枚乾かす様子を目にした。東日本大震災では、歯の治療費によっての身元確認が行われたという。南海トラフ地震が発生した場合、死者は県内だけでも約10万5千人と想定されている。各医院が所有する膨大な歯科情報の中から迅速に個人を特定するため、全国レベルでカルテの電子化や書式の統一を早急に進めなくてはならないと訴える。

(社会部・鈴木明彦)

「大丈夫」の声掛けに涙▶▶重要性増す心のケア

歯治療痕から個人特定▶▶診療情報の統一化を



7月中旬、広島県呉市安浦地区。巡回診療に向かう、静岡赤十字病院の救護班。



被災した歯科医院の状況を確認する柳川忠広会長(左)。